農村住居における生活単位と住まい方を通してみた 通世代家族の住空間

A BASIC STUDY ON THE LIFESPACE OF THE EXTENDED FAMILY AT RURAL HOUSE TO RESEARCH THE RELATION BETWEEN THE UNIT OF FAMILY AND THEIR LIFESTYLE

岡部 雅美^{*2}, 伊藤 庸一^{*1}
Masami OKABE and Yoichi ITO

In our time, there are various family which are single-person-households, nuclear family and extended family, etc.. In this paper we will clear up the lifespace of the extended family at rural house by researching the relation between the unit of family and lifestyle of 17th extended family. We cleared as follows:

- 1) The extended family inherit customary lifestyle which are eating, cooking, conversing and holding ceremony together with family. As another, the husband and wife or children of the extended family eat, cook, hold conversation and receive by oneself.
- 2) The extended family inherit the mutual aiding that is customary lifestyle. Each member of family has one's part and helps to each other.
- 3) The extended family put much value on the living with extended family.
- 4) We conclude that the living with extended family will be inherited.

Keywords: rural house, extended family, function of family, living with extended family,
unit of family, lifestyle, mutual aiding

農村住居、通世代家族、家族の機能、同居、生活単位、住まい方、相互扶助、

1. はじめに 農村の住居ではかつてより通世代家族^{*1}が一般であり、その住まい方には地域ごとの特徴がみられた。清水浩昭^{*2}によると「同居」は東北・北陸地方に多く、「別居（隠居）」は四国・九州地方に多いと言われている。いずれの通世代家族にも共通することは、先祖代々その地域で世代の異なった人々が共に暮らし、安心した生活を営んでいたということである。

農村の家族は、通世代家族を構成する成員が役割を分担することで生業を充実させ、生産・生活を支えてきた。また、通世代家族では高齢者自身も家族の一員としての位置づけが確保され、高齢者のこれまでの経験が大切な知識として尊重されていたので、家族から除外されることはなかった。川本彰の「近代社会における家の構造」^{*3}を引用すれば、家族の機能は①文化の伝承、②人格の形成、③子供の育成、④経済的な安定であり、農村の家

族はこれらの家族の機能を充足していた。「イエ制度」などのしがらみもあったが、農村の通世代家族はかつての日本の家族像として定着していた。

戦後、「イエ制度」が廃止され「個」の尊重が顕著となった。また、農業社会から工業社会へ移行し雇用化が進化するなどの産業構造が変化した。その結果、家族の生活の場と職場の分離が著しく、農村では新しい職業を求めた若い世代の流出が著しくなった。農業を生業としていた家族では家族人数が多いことは働き手が多いことを意味していたので通世代家族が適当であった。しかし、雇用化の波及にともない働く場所に身軽に移動できる小家族が適当となり^{*4}、結果として、高度成長期には夫婦とその子からなる核家族が日本の家族として定着した。

近年、ますます「個」が尊重され、家族形態も多岐にわたり一概に日本の家族像を言い表すことは難しくなっ

^{*1} 日本工業大学建築学科 教授・工博

^{*2} 日本工業大学建築学科 特別研究員・工修

Prof., Dept. of Architecture, Nippon Institute of Technology, Dr. Eng.
Postgraduate, Dept. of Architecture, Nippon Institute of Technology,
M. Eng.

てきている。多様な家族形態がみられる現在の家族観は、夫婦別姓などが主張されるように、個人の「人格」を尊重したものになった。つまり、家族像は「生業と生活を共に営んできた生活共同体」（極相）から、近代化の中で「個」の主張や雇用化の進展により家族像が変化し（遷移）、高度成長をむかえた時期では核家族が定着（極相）、さらに高度成長が低迷し「個」が誇張され人格を尊重した多様な家族像が表出（遷移）、という極相→遷移→極相という経緯を踏まえ、現在、再び遷移の時代を迎えている（図1）。

一方、こうした家族像の変化とは別に高齢化や住宅難などの社会問題が否応なしに進むなか、通世代家族の相互扶助や介護機能に対する憧憬が強くなってきている^{*5}。また、住宅供給においても二世帯住宅が著しい。^{*6}住宅金融公庫による「二世帯住宅割増融資の動き」をみてもここ7・8年の間、急激に二世帯住宅の供給がのびていることがわかる^{*7}。供給されている二世帯住宅は従来の通世代家族の住まい方をそのまま踏襲しているのではなく、建築計画学研究等ですでに明きらかとされているような^{*8}、嫁と姑の問題、世代間の生活時間や生活の仕方のずれなどの問題を考慮した新しい生活スタイルを提示している。しかし、世帯別に生活領域を分離するスタイルが多く、世代の異なる家族成員が共に暮らす意味がうすれているようにも感じられる。

つまり、現在、個人の人格を尊重する価値観をもつ人々による多様な家族形態が表出する一方で、高齢者を含めた三・四世代家族が住める住居が嗜好されており、新しい家族観を背景とする新しい三・四世代家族の住まい方とその住空間^{*9}が模索されているといえよう。

こうした家族観が変化するなか、これまで行われてきた研究をみると、三世帯同居に関する研究では都市および都市近郊を対象とし、三世帯家族を親世帯と子供世帯に分け、2つの世帯がどのように住み合っているかという論文が多い。一方、農村を対象とする研究は少なく、隠居慣行の住まい方や隠居を慣行とする地域での住まい方変化に関する研究がみられるだけで、家族観の変化を背景とする、農村の同居を慣習とする地域を対象とした、新しい通世代家族の住空間に関する研究はみられない。

本研究では従来より三・四世代家族（通世代家族）が共に暮らし、家族観の変化に大きく影響されながらも、今なお通世代家族が住み続けている農村を対象とし、農村での通世代家族の住まい方と住空間の特徴を捉え、新しい家族観が波及する現代における通世代家族が共に住む可能性と、現代社会にみ合った通世代家族の住まい方とその住空間形成の指針を得ることを目的とする。

2. 家族の定義 家族社会学では家族を「夫婦とその子からなる第1次福祉集団」^{*10}と定義し、その家族形態として直系家族・複合家族などをあげている。しかし、

森岡清美の「新しい家族社会学」^{*10}の中でも指摘されているように、現代社会での家族は多様であり、家族の意味も変化している。現在では多様な家族形態がみられるが、本稿では、前述したように「家族の機能」を充足し、家族成員それぞれが家族の一員として位置づけられてきた通世代家族を取り上げる。

近代化により農村の家族から若者が流出した。また、現在でも単身赴任や進学のための転出など一時的に家族と離れ生活をしている人もいる。本稿ではあくまでも家族の機能を充足できる家族成員の集団を家族と位置づけており、経済的につながっている一時的な転出者も家族の成員とみなす^{*11}。

農村の家族の特徴は、土地があるためか永続的にその土地で家族が生活を営む傾向が高いということであろう。森岡清美^{*10}が提示する家族の成長段階を参考に農村の家族の成長をみると、次男や三男は結婚を機に本家から分家し自分の家族の核をつくる（第1段階）。やがて子供が生まれ（夫婦と幼児の家族＝第2段階）、その子供が小学校へ進学し自立し始める（夫婦と自立した子供からなる家族＝第3段階）。その自立した子供が結婚をし二世帯家族となり（夫婦と若夫婦からなる家族＝第4段階）、子供夫婦の子供が生まれた段階で三世帯家族（夫婦と若夫婦と子供からなる家族＝第5段階）となる。そして三世帯家族は年長者世代の他界や次世代の誕生を繰

図1 家族像の遷移と極相モデル

●=○は世帯主夫婦、▲(△)は世帯主世代の次世代、■(□)は▲の次世代

図2 農村家族の成長段階モデル

表 1 対象事例の概況

対象	a	b	c	d	e	f	g	h	i
家族構成	68★=☆58 37○=34●=○32	67●=○ 30△=1□	60★=☆67 30●=○	88●=○88 40△=△37	59●=○40 5●=△5	59●=○88 ●=○	38△=△31 7●=5	85★=☆57 32●=○32	71★=☆ 40●=○32
所在対象	福島県 福島市	福島県 福島市	滋賀県 マキノ町	福島県 福島市	福島県 福島市	滋賀県 マキノ町	福島県 福島市	福島県 福島市	福島県 福島市
家族構成	73★=☆ 14△=12	78★=☆ 15●=○13	1●=☆77 53●=○38	83★=☆80 55●=○58	78●=○77 55△=△21	57●=○66 34△=△34	85★=☆83 43△=△44	100◇=☆ 57○=●80	1●=☆ 28△=△1
所在	京都府 美山町	福島県 福島市	福島県 福島市	福島県 福島市	福島県 福島市	福島県 福島市	福島県 福島市	福島県 福島市	京都府 美山町

◇：最年長世代、★（男性）または☆（女性）：親世代、●または○：世帯主世代、△または□：若世代、■または□：孫世代、
=：夫婦を示す、-：親子またはきょうだいを示す、数字は調査時の年齢を示す

図 3 間取りと住まい方

り返ししながら通世代家族として永続的に存続する。一方第4段階の時に分家した次男や三男は第1段階に戻り、新しい通世代家族にむかって成長する。つまり、農村の家族は分家から通世代家族にいたるまで遷移し、通世代家族となったとき極相状態を迎える。そして、極相状態を保ちながら、次世代へと永続的に家族を持続する(図2)。

3. 調査地の選定方法と調査概要 1) 調査対象の選定

調査対象は次の順で選定した。①日本での同居を慣習とする地域を抽出するため、前述した清水の「東北・北陸に同居が、四国・九州に別居(隠居)が多い」^{*2}というデータと、民俗学辞典^{*12}による「隠居は、東北地方や日本海側にはみられず、濃厚な伝承がみられる地域は、磐城・常盤を北限として伊豆諸島、三河の一部、志摩から熊野にわたる諸地域、瀬戸内海の島、四国、九州」とするデータを日本地図に示し、おおまかに同居を慣行とする地域を抽出。②同居を慣習とする地域のうち、一般世帯における家族数が5～6人以上である地域^{*13}、中大路美智子の「高齢単身世帯の住宅事情に関する考察」^{*14}より捉えられた「高齢者率が比較的高く、単身世帯率が低い地域」、小川正光の「老人を含む世帯の住宅事情における地方類型」^{*15}の中で「伝統的な大家族の住生活を表す因子と、老人人口が多く、戦前からの定住も高い因子、農村的な住み良さを示す因子の3つの因子が示す地域」のデータを参考にし、対象とする都道府県を選定。③選定した都道府県の中で、比較的地域の特徴的な平面構成をもつ住居が多く現存する農村地域^{*16}(福島県館岩村・福島県郡山市・福島県下郷町・滋賀県マキノ町・京都府美山町)を取り上げ、④それぞれの地域の中で、今なお通世代家族が同居を営んでいる17事例を対象として選定した。2) 調査の方法 対象事例では、①間取り採図調査、および、②主として世帯主夫婦を回答者とした、家族構成・住まい方・家族成員間の相互扶助・通世代家族の利点欠点・住まい方のコツなどに関するヒアリング調査を実施した。

4. 現代的な通世代家族の住まい方特性 1) 対象事例の概要 対象事例の家族数は4～10人と分布するが、6人家族が最も多く、平均すると5.95人である。家族の世代構成は、親世代(世帯主を交替した世代)＋世帯主世代＋若世代(世帯主世代の子供のうち未婚者)、あるいは

世帯主世代＋若夫婦世代(世帯主世代の子供のうち既婚者)＋孫世代(若夫婦世代の子供のうち未婚者)という三世代家族が14事例、親世代＋世帯主世代＋若夫婦世代＋孫世代という四世代家族が2事例、最年長世代(親世代の親)＋親世代＋世帯主世代＋若夫婦世代＋孫世代という五世代家族が1事例である。

母屋は比較的各地域の特徴を表す平面で構成され、家族数に応じて母屋の他に別棟がもうけられている。母屋は比較的平屋建てが多いが、住要求に応じた改築や増築により、調査時点では平屋建て母屋(7事例)のほかに、2階建て母屋(7事例)や平屋建て母屋と別棟(2事例)、2階建て母屋と別棟(1事例)がみられる。また、部屋数は地域性や別棟の有無、住居の大きさによって異なるが、7～9部屋構成の住居が多い(表1, 図3)。

2) 通世代家族の生活単位 家族社会学では、家族とは夫婦と子供からなる第1次福祉集団とされている。これを踏まえると、通世代家族とは核家族が連続した集団といえる。家族を構成する成員(個人)を要素とすると、夫婦は要素が婚姻というかたちで組合わさった集合体であり、子供と親は血縁という枠組みでくくられる。一般に家族社会学では夫婦や親子、きょうだいなどの関係を要素的關係といい、嫁と姑、祖父母と孫など、要素的關係のある要素を介し、核家族の枠をこえた関係を複合的關係と定義している^{*10}(図4)。

そこで、まず、家族社会学で定義されている家族関係を参考に生活単位(生活行為を行う要素の組み合わせ)を抽出する。

通世代家族は世帯主、世帯主婦(世帯主の妻)・親夫(世帯主の父親)・親婦(世帯主の母親)・若夫(世帯主夫婦の結婚した子供またはその夫)・若婦(世帯主夫婦の結婚した子供またはその妻)・若世代(世帯主夫婦の未婚の子供)・孫夫(世帯主夫婦の結婚した孫またはその夫)・孫婦(世帯主夫婦の結婚した孫またはその妻)・孫世代(世帯主夫婦の未婚の孫)・最年長夫(世帯主の祖父)・最年長婦(世帯主の祖母)という要素で構成される。これらの要素が、生活行為を行うとき、どのような組み合わせをみせるかという点、世帯主夫婦・若夫婦・親夫婦・孫夫婦・最年長夫婦など、婚姻によって組合わさった夫婦単位、兄弟・姉妹のきょうだい単位、嫁と姑の単位(嫁姑単位)、夫婦と子供の核家族単位、三世代家族のうち孫世代をのぞいた世帯主世代＋若夫婦世代という単位(2/3単位)、四世代家族のうち親世代をのぞいた世帯主世代＋若夫婦世代＋孫世代という単位(3/4単位)、五世代家族のうち最年長世代をのぞいた世帯主世代＋若夫婦世代＋孫世代という単位(4/5単位)、すべての要素が組合わさった通世代家族単位の7つの家族関係がみられる。さらに、この7つの家族関係に加えて、要素が単独で生活行為を行う場合を考慮

図4 通世代家族の家族関係

すると、通世代家族の生活単位は、上記7つの家族関係と単独で生活行為を行う要素の8つとなる。

3) 通世代家族の生活単位と生活行為との関係 (図5)

本稿では、詳細な生活行為では通世代家族の住まい方の特徴が捉えにくいと考え、住居学での生活行為分類を参考に、「ネル(就寝)」「ツクル(炊事)」「タベル(食事)」「ダンラン(団らん)」「ムカエル(接客)」「オコナウ(行事・儀式)」の6つの行為を生活行為として取り上げる^{*17}。

生活単位と上記6つの行為を対応させると、「ネル」では要素単位・夫婦単位・きょうだい単位・核家族単位がみられ、生活単位は、最年少世代の成長段階や世帯交替に関係する。すなわち、若夫婦とその子供の「ネル」における生活単位は、子供の成長にあわせ順次、核家族単位から、夫婦単位ときょうだい単位あるいは夫婦単位と要素単位へ分離し、さらに、きょうだい単位は要素単位へ細分化される。また、世帯を交替した親夫婦は、夫婦単位から要素単位へ「ネル」の生活単位を変化させる傾向をみせる(図6)。「ツクル」では、主として嫁姑単位あるいは要素単位がみられるが、加えて、夫婦単位あるいは核家族単位がみうけられ、生活単位に重層性をみせる。すなわち、嫁姑単位あるいは要素単位での「ツクル」は通世代家族単位の「タベル」に対応し、その「ツクル」に平行するかたちで、夫婦単位での「タベル」や核家族単位での「タベル」に応じた「ツクル」が存在する。「タベル」は「ツクル」と連動するかたちで生活単位が定まり、結果として「ツクル」の生活単位の重層

生活単位	記号	ネル	ツクル	タベル	ダンラン	ムカエル	オコナウ
要素単位	◇	●					
	★	●					
	☆	●					
	●	●					
	○	●					
	▲	●					
	△	●					
	■	●					
夫婦単位	★=☆	●					
	●=○	●					
	▲=△	●					
	■=□	●					
きょうだい単位	▲▲	●					
核家族単位	●=○	●					
	▲=△	●					
	■=□	●					
	▲▲	●					
嫁姑単位	☆○	●					
	○△	●					
	○△□	●					
2/3単位		●					
3/4単位		●					
4/5単位		●					
通世代家族単位		●					

2/3単位：世帯主世代+若夫婦世代/三世代家族、3/4単位：世帯主世代+若夫婦世代+孫世代/四世代家族、4/5単位：親世代+世帯主世代+若夫婦世代+孫世代/五世代家族示す。
● = 1 生活単位

図5 生活単位と住まい方との関係

家族構成 (最年少世代の年代)		三世代家族																四世代家族
生活単位	記号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q
要素単位	◇																	
	★																	
	☆																	
	●																	
	○																	
	▲																	
	△																	
	■																	
夫婦単位	★=☆																	
	●=○																	
	▲=△																	
	■=□																	
きょうだい単位	▲▲																	
核家族単位	●=○																	
	▲=△																	
	■=□																	
	▲▲																	

■ = 1 生活単位

a ~ q の記号は各事例を示す

図6 「ネル」での生活単位

記号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q
ツクル	☆																
	○																
	★=☆																
	▲=△																
	○△																
タベル	☆																
	★=☆																
	3/4単位																
	4/5単位																
	通世代家族																
ダンラン	★=☆																
	▲=△																
	3/4単位																
	4/5単位																
	通世代家族																
ムカエル	☆																
	★=☆																
	●=○																
	▲=△																
	2/3単位																
通世代家族	3/4単位																
	4/5単位																
	通世代家族																
	通世代家族																

■ = 1 生活単位

図7 生活行為別にみる生活単位の重層性

生活単位	母屋1階	母屋2階	別棟1階	別棟2階
要素単位	◇			
	★			
	☆			
	○			
	▲			
	△			
	■			
	□			
夫婦単位	★=☆			
	●=○			
	▲=△			
	■=□			
きょうだい単位	▲▲			
核家族単位	●=○			
	▲=△			
	■=□			
	▲▲			

● = 1 生活単位

図8 生活単位別にみる「ネル」での部屋利用

性に連動し、「タベル」の生活単位にも重層性が表れる。「ダンラン」は通世代家族単位が多くみられるが、重層するかたちで、夫婦単位あるいは核家族単位がみられるほか、親世代をのぞいた3/4単位や4/5単位の生活単位もみうけられ、「ダンラン」の生活単位の複雑化が示唆される。また、「ムカエル」では、通世代家族単位がほとんどをしめるが、夫婦単位あるいは核家族単位での「ムカエル」もみられる。「ムカエル」での生活単位の重層性は、客層の違いによって生じる。最年少世代の「ムカエル」は比較的、幼少の頃から要素単位がみられる(図7)。一方、「オコナウ」では通世代家族単位が主で、他の生活単位の重層性はみられない。

具体的にみる。①aのように三世代家族で最年少世代が幼少(小学校入学前段階)の場合:「ネル」では夫婦単位と若夫婦と孫世代の核家族単位がみられ、「ツクル」では嫁姑単位、「タベル」「ダンラン」「ムカエル」「オコナウ」では通世代家族単位がみられる。②hのように三世代家族で最年少世代が小学生の場合:「ネル」では夫婦単位と核家族単位(世帯主夫婦と幼少の若世代)、要素単位(小学2年の若世代)がみられる。「ツクル」は嫁姑単位で、「タベル」「ダンラン」「ムカエル」「オコナウ」は通世代家族単位で営まれる。また、iのように「ネル」にきょうだい単位がみられる場合もある。③mのように最年少世代が既婚の場合:「ネル」では夫婦単位のみがみられる(若世代は結婚を機に要素単位から夫婦単位となる)。「ツクル」は三つの世代の嫁姑単位、「タベル」「ダンラン」「ムカエル」「オコナウ」は通世代家族単位で営まれる。④oのように最年少世代夫婦の子供が誕生するなど、四・五世代家族の場合:「ネル」では要素単位・夫婦単位・核家族単位・きょうだい単位とさまざまな生活単位が表れる。「ツクル」には嫁姑単位に加えて要素単位がみられ、「タベル」では3/4単位と要素単位が、「ダンラン」は3/4単位、「ムカエル」は3/4単位のほか要素単位が表出するなど、生活単位の重層性がみられる。しかし、「オコナウ」は通世代家族単位で営まれ、生活単位の重層性はみられない。

4) 生活行為別に見る部屋の利用 前述のように、現代の通世代家族の住まい方の特徴は、「ネル」にみられる家族の成長段階に応じた生活単位の変化と、「ツクル」

「タベル」「ダンラン」「ムカエル」にみられる生活単位の重層性である。こうした特徴的な住まい方での部屋利用を検討すると、「ネル」での部屋利用は、生活単位別よりも年代によって利用される部屋が規定される(図8)。すなわち、夫婦単位のうち世帯主夫婦の「ネル」部屋を母屋1階に位置づけ、若夫婦や孫夫婦は2階の部屋を「ネル」部屋として利用する。また、要素単位では親世代の「ネル」部屋を母屋1階にもうけ、若い世代ほど母屋2階や別棟に「ネル」部屋を確保するほか、一時的に「オコナウ」部屋を兼用する。要素単位の若世代が既婚し、夫婦単位になると、要素単位で利用していた「ネル」部屋として利用する。

生活単位の重層性がみられる生活行為(「ツクル」「タベル」「ダンラン」「ムカエル」)では、通世代家族単位(嫁姑単位)で利用する「主(メイン)」の部屋と、重層する生活単位が利用する「副(サブ)」の空間がもうけられ、生活単位の重層性は空間構成に連動する(図12)。すなわち、「ツクル」をみると、嫁姑単位は母屋1階の部屋を利用し、重層する要素単位あるいは夫婦単位の部屋は、別棟1階あるいは母屋1階の別の部屋を利用する。「タベル」部屋・「ダンラン」する部屋・「ムカエル」部屋においても、通世代家族単位は母屋1階の部屋がを利用し、重層する要素単位あるいは夫婦単位、核家族単位の部屋は、母屋1階の別の部屋を利用する(図9)。

「オコナウ」では母屋1階の部屋を利用し、別棟や母屋2階の部屋の利用はない。

5. 要素間の役割分担と相互扶助 「1. はじめに」で記したように、近年、通世代家族の相互扶助や介護機能への憧憬が著しい。しかし、一方ではあまり干渉されたくないと言うプライバシーの尊重も顕著である。

かつての通世代家族では、家族が一体となって生業(農業)を共に営んでいた。しかし、現在では、農業を世帯主夫婦あるいは親世代が営み、他の世代は比較的、外に働きに出ている。特に、世帯主婦あるいは若婦が外へ働きに出る傾向は以前と比べ著しい。

通世代家族が家族の機能を充足するためには、要素間の相互扶助が必要不可欠である。まして、世帯主婦あるいは若婦が外へ働きに出る傾向が著しくなった今日、ますます要素間の相互扶助が必然となる。世帯主婦あるいは若婦の外の職の有無に影響される家事では、世帯主婦・若婦の相互扶助が著しい。すなわち、嫁姑単位で行う「ツクル」では世帯主婦が主として行い、その親婦あるいは若婦が手伝うかたちで行う。しかし、世帯主婦あるいは若婦が外で働いている場合、朝・昼・夜と「ツクル」作業を分担し、お互いに手伝いあう。また、親世代夫婦単位が「ツクル」で重層している場合は、嫁姑単位によるおかずの差し入れなどがみられる。掃除のうち、「ネ

各生活単位がどの部屋でどのような行為を行っているかを示す

図9 重層する生活行為での部屋の利用例(事例:p)

ル」部屋についてはそれぞれの生活単位が掃除を行うが、家族が共通に利用する部屋については、主として世帯主婦あるいは若婦が行い、若婦や親婦が手伝う。掃除でも世帯主婦あるいは若婦の外へ働きにでる状況に応じた、週末にいっしょに行う・部屋を分担する・屋敷内と庭で分担するなどの工夫が施されている(図10)。ただし、重層する生活単位で利用する部屋は、それぞれの生活単位の要素が掃除を行い、他の生活単位は立ち入らない。洗濯では、家族全員分を世帯主婦が中心に行う傾向をみせるが、一部では、共同の洗濯機を利用するものの、夫婦単位あるいは核家族単位で洗濯を行う場合がみられる(図11)。

子供のしつけでは、主としてその子供の両親が行う傾向みせるが、家の慣習やしきたりなどについては、祖父母にあたる世代が行う。また、両親が外へ働きに出ている場合は、祖父母にあたる世代が日中も子供の世話を行い、両親世代を助ける(図12)。

先祖代々行われてきた毎日のお供えは、神棚・仏壇を問わず、女性や若い世代が行うことは少なく、主として世帯主あるいは親夫が行う(図13)。

通世代家族の特徴でもある介護機能については、家族

のうち夫が病気になるとその妻が看病をし、妻が看病に時間を要して行えなくなった家事を他の世代が行い、妻を助ける。妻が病気になると、看病は親世代や次世代の妻が行い、看病に手が取られる分、行えなくなった家事は、男女を問わず要素が互いに助け合う(図14)。

通世代家族単位で行う「オコナウ」では、式の準備は男性、式のための「ツクル」は女性が担う。式の準備では、世帯主が中心となり、親世代がアドバイス、次世代が手伝うという仕組みがとられる。一方、「ツクル」は、世帯主婦が中心となり、親世代はアドバイス、次世代が手伝うという仕組みで行われる(図15)。

6. 通世代家族の同居への志向 これまで捉えてきたように、現代の通世代家族は、かつての通世代家族にみられたような要素間の相互扶助や介護機能を温存させ、生活単位あるいは生活行為に応じた部屋を重層することで、新しい現代的な同居の住まい方を営んでいる。

同居に対しても「相互扶助」「祖父母と孫の交流」「楽しい」「安心」などの多くの利点をあげ、欠点のみられないくらいに同居の住まい方を高く評価している。

また、現在の「ツクル」「タベル」「ダンラン」「ムカエル」、それぞれの生活行為に応じた部屋の重層化に

	「ツクル」の 分担	分担	ツクル	掃除
	★	●	朝 昼 晩	●
a	★	●	●	●
b	○	△	△	△
c	★	○	★	○
d	○	△	△	△
e	○	○	○	○
f	★	○	○	○
g	○	△	△	△
h	★	●	●	●
i	○	○	○	○
j	★	●	●	●
k	○	△	△	△
l	★	○	★	○
m	○	△	△	△
n	○	○	○	○
o	★	○	○	○
p	★	○	○	○
q	○	△	△	△

図10 家事での相互扶助

	★=☆	●=○X△	▲=△X△	家族 全員
a	★	●	▲	★
b	★	●	▲	★
c	★	●	▲	★
d	★	●	▲	★
e	★	●	▲	★
f	★	●	▲	★
g	★	●	▲	★
h	★	●	▲	★
i	★	●	▲	★
j	★	●	▲	★
k	★	●	▲	★
l	★	●	▲	★
m	★	●	▲	★
n	★	●	▲	★
o	★	●	▲	★
p	★	●	▲	★
q	★	●	▲	★

図11 洗濯での相互扶助

	★	☆	●	○	▲	△	□	■
a	★	☆	●	○	▲	△	□	■
b	★	☆	●	○	▲	△	□	■
c	★	☆	●	○	▲	△	□	■
d	★	☆	●	○	▲	△	□	■
e	★	☆	●	○	▲	△	□	■
f	★	☆	●	○	▲	△	□	■
g	★	☆	●	○	▲	△	□	■
h	★	☆	●	○	▲	△	□	■
i	★	☆	●	○	▲	△	□	■
j	★	☆	●	○	▲	△	□	■
k	★	☆	●	○	▲	△	□	■
l	★	☆	●	○	▲	△	□	■
m	★	☆	●	○	▲	△	□	■
n	★	☆	●	○	▲	△	□	■
o	★	☆	●	○	▲	△	□	■
p	★	☆	●	○	▲	△	□	■
q	★	☆	●	○	▲	△	□	■

図14 介護での相互扶助

	しつけ
	中心 手伝い
祖父	...
祖母	
祖父母	...
母親	...
両親	
祖母と母親	..

・ = 1 事例

図12 しつけでの相互扶助

	神棚	仏壇
★		
☆		..
●		
○		...
▲		
△		
○or☆		

・ = 1 事例

図13 お供えでの役割分担

	式の準備	料理の準備
	助言 主 手伝	助言 主 手伝
a	★	★
b	★	★
c	★	★
d	★	★
e	★	★
f	★	★
g	★	★
h	★	★
i	★	★
j	★	★
k	★	★
l	★	★
m	★	★
n	★	★
o	★	★
p	★	★
q	★	★

図15 「オコナウ」での相互扶助

	同居の利点				同居のコツ
	互いに助け合える	祖父母と孫の交流	楽しいにぎやか	安心する心強い	
a					隠し事をしない
b					
c					互いに遠慮し合う
d					世帯主を中心にまとまる
e					
f					
g					互いに意見を譲り合う
h					
i					子供を間に会話をする
j					
k					
l					互いに信頼し合う
m					互いに譲り合う
n					
o					
p					
q					

図16 同居への評価と住まい方のコツ

加え、「ムカエル」部屋の細分化や、子供部屋の充実など要素単位での生活の充実を要求している反面、同居のコツとしては「世帯主世代を中心としてまとまる」「互いに遠慮しあう」「譲り合う」「信頼し合う」などの、要素間あるいは世代間の心の譲り合いをあげている。つまり、これからも、通世代家族の同居では、要素間の心の交流や相互扶助を大切にしながら、通世代家族単位での生活及び住空間と、要素単位あるいは夫婦単位での生活や住空間を充実させることをふまれば、通世代家族の同居の可能性があるといえる（図16）。

7. まとめと今後の展開 現代でも共に住み続けている通世代家族では、要素は人格を尊重しながらも、互いに役割を分担することで、家族の一員として位置づけられ、安心した生活を営んでいる。また、現代の通世代家族は同居を高く評価し、これからの通世代家族の同居の可能性を示唆させる。

現代的な通世代家族の住まい方には、従来の同居慣習の住まい方を規範としながら、「ツクル」「タベル」「ダンラン」「ムカエル」に生活単位の重層性をみせ、生活単位の重層性に連動するかたちで、利用する部屋の重層性が表出する、という特徴をみせる。

すなわち、現代の通世代家族の住空間計画では、①「ネル」での生活単位の細分化と、生活単位別にもうけられる部屋構成（私的住空間の構成）、②「ツクル」「タベル」「ダンラン」「ムカエル」での生活単位の重層性と、連動する部屋の重層的な構成（共的住空間の構成）、③通世代家族単位を崩さず永続的に行われる「オコナウ」での部屋の位置づけ（公的住空間の構成）、がポイントであり、それぞれの特性に応じた住空間の計画が重要であると考えられる。

今後は、通世代家族の住空間のうち、私的住空間・共的住空間・公的住空間それぞれに焦点をあて、それぞれの住空間構成を詳細に検討し、現代的な通世代家族の住空間を解明、これからの通世代家族の住空間計画指針を明らかにしたい。

謝辞

末筆ながら、調査にご協力いただきました調査対象の皆さまに心から感謝申し上げます。

参考文献・注

- *1 その土地で誕生と他界を繰り返す、永続的に生活を営んでいる家族を示す
- *2 昭和50年の国勢調査結果を資料とし、高齢者世帯を「別居」「同居」に分類、都道府県別に集計・考察したものである。清水浩昭：「農村老人の居住形態-宮城県志波姫町と鹿児島県大浦町の比較研究」、人口問題研究所報 第156号、pp42～45、厚生省人口問題研究所、1980年
- *3 川本彰：「近代社会における家の構造」、社会思想社、1973年
- *4 菅原眞理子：「新・家族の時代」、中公新書、1992年
- *5 総理府広報室：「家庭・家族に関する世論調査」、1986年
- *6 二世帯住宅研究所：「新二世帯住宅百科」、旭化成株式会社、1990年
- *7 朝日新聞 1993年4月24日版
- *8 佐藤平他：「三世帯同居住宅の建築計画に関する研究-その3-若主婦から見た同居形態志向について」、日本建築学会東北支部研究報告集、pp69～72、1985年、「三世帯同居住宅の建築計画に関する研究-その4-属性と平面構成のタイプについて」、日本建築学会学術講演梗概集、pp211～212、1985年、「三世帯同居住宅の建築計画に関する研究-その5-住要求と同居に対する意識の相違について」、日本建築学会学術講演梗概集、pp213～214、1985年、「三世帯同居住宅の建築計画に関する研究-その6-日常生活行為の分担と住まい方志向について」、日本建築学会学術講演梗概集、pp215～216、1985年、「三世帯同居住宅の建築計画に関する研究-その7-分居形態世帯に関するケース・スタディ」、日本建築学会東北支部研究報告集、pp87～90、1985年
- *9 本稿での住空間は、母屋と別棟の住居空間を示す
- *10 森岡清美他：「新しい家族社会学」、培風館、1991年
- *11 本稿の対象事例には該当する一時的な転出者はみられないが、家族の定義とし一時的に転出する人を家族の要素として位置づけた。
- *12 柳田邦男監修：「民俗学辞典」、東京堂出版、1980年
- *13 日本統計局：「日本統計年鑑 平成2年度版」、1990年
- *14 中大路美智子：「高齢単身世帯の住宅事情に関する考察」、日本建築学会学術講演梗概集、pp629～630、1987年
- *15 小川正光：「老人を含む世帯の住宅事情における地方類型」、日本建築学会学術講演梗概集、pp631～632、1987年
- *16 本稿での農村は、「日本の農村集落」（農業集落研究会編纂 農林統計協会発行 1977年）を参考に、平地村の兼業的集落とする。なお、農村住居とは、前述した集落に位置し、その土地に永続的に定住、農業に従事している家族成員が一人以上暮らしている住居を示す
- *17 林知子他：「住まい方から住空間をデザインする」、彰国社、1991年

（1995年2月10日原稿受理、1995年8月16日採用決定）